

# 大学生の小学校時代におけるエピソードと 学校適応感に関する一研究

鉤 治 雄\*

## A Study on Contents of Episode and Feelings of Adjustment in Primary School Life — In Case of University Students —

Haruo MAGARI\*

The purposes of this study were 1) to clarify the contents of episode in primary school life in relation to hidden curriculum, 2) to examine the effects of episode on the degree of satisfaction as feelings of adjustment in primary school life, and 3) to investigate the relationship between the contents of students' episode in their primary school period and cognition towards their teachers. For these purposes, a questionnaire was administered to 496 university students.

From principal components analysis concerning contents of episode in primary school life, eight factors were found. Each factor was labeled respectively as follows: F1: contents of lessons; F2: teachers' appearance; F3: outward environment; F4: punishment by teachers; F5: inward environment; F6: contents of teaching material; F7 psychic traumas, and F8: school events. Also, many items regarding contents of episode were significantly related to the degree of satisfaction in primary school life. Furthermore, the strength of students' episode in primary school period were partially connected with cognitions towards their teachers.

**Key Words** : contents of episode, hidden curriculum, feelings of adjustment, principal components

### 問題と目的

従来のがが国の学校教育においては、知識や概念を児童・生徒に理解させ、獲得させることに重点がおかれ、個人の内面における感覚的・感情的な諸経験のもつ意味については、軽視されてきたきらいがある。

しかしながら、学校生活という場においては、教育課程の目的が、言語や数量関係等に関する基礎的

な知識や技能の習得をめざす一方で、学校内外の社会生活経験や人間関係をとおして、協同の精神を培い、心身の調和的発達を図ることにあるならば、学校生活全般における、児童・生徒の感情的経験や体験的エピソードのもつ意味を無視することはできない。

こうした点に関連して、ジャクソン (Jackson, P. W., 1968<sup>3)</sup>) やブルーム (Bloom, B. S., 1981<sup>1)</sup>) は、既に、「潜在的カリキュラム」や「隠れたカリキュラ

\* 創価大学教育学部

Faculty of Education, Soka University

ム」の観点から、公的（顕在的）カリキュラムの背後に潜む教育力や、諸教科の授業内容以外の隠れた企図されない教育的作用が、児童・生徒の人格形成に影響を及ぼす可能性について言及している。

潜在のカリキュラムには、大別して、1) 教師と生徒、もしくは生徒相互の触れ合いによる人格的次元、2) 地理的環境や施設等の背景の次元、および、3) 指導・経営的組織や儀礼、方法といった制度・組織的次元の3つの次元がある。潜在のカリキュラムに象徴される教育的作用は、基本的には、肯定的・否定的感情を伴った体験のエピソードとして、個人の中に内面化され、蓄積されていると考えられるが、こうしたエピソード内容を明らかにすることは、今後の教育内容や学校教育のあり方を模索する上で、きわめて重要であると考えられる。

そこで、本研究の第1の目的は、こうした潜在のカリキュラムのひとつの指標としての小学校時代のエピソード内容を、大学生を対象とした回想的調査をとおして抽出し、その印象度や形成時期について検討することにある。小学校時代の自伝的記憶については、既に、尾原ら(1994<sup>8)</sup>)や齋藤(1994<sup>12)</sup>)が、時間的体制化や随伴感情と関連の上から検討を行なっているが、いわゆるエピソードの内容や種類に関して、吟味している訳ではない。

また、鈞(1994<sup>9)</sup>)は、これまでに、大学生の小学校時代における教科外活動や学校内外の諸環境に関するエピソード内容の抽出を試みているが、それらは、あくまでも潜在のカリキュラムにおける背景的次元や組織的次元を中心としたエピソードに限定されており、その意味では、潜在のカリキュラムの部分的な側面に言及がなされたにすぎなかった。

そこで、本研究では、潜在のカリキュラムにおける最も重要な次元としての、教師と生徒、生徒相互の触れ合いによる人格的次元を加味することで、より全体的な視点から、エピソード内容の抽出を試みようとした。

以上の点に加えて、本研究では、今ひとつの目的として、抽出されたエピソードの印象度と、学校適応感の一指標としての、大学生自身のかつての小学校生活全般に関する充実感や、教師の人格的影響力に関する認知傾向との関連性について検討を試みた。小学校生活における肯定的なエピソードの存在は、個人のかつての小学校生活への適応感を規定してい

る重要な要因であることが予想される。既に、加納(1994<sup>4)</sup>)は、従来の学校適応感に関する研究が、調査実施時に学校に在籍中の生徒を対象としたものが多い中で(内藤他, 1987<sup>7)</sup>, 谷井・上地, 1994<sup>13)</sup>), 高校卒業生を対象とした研究において、在学中のクラブ活動や寮生活体験の有無が、かつての高校生活への充実感や満足感と有意に関連することに言及している。そうした点では、大学生が回想的にとらえた、自らの小学生時代におけるエピソードの印象度もまた、小学校生活に関する充実感や、教師の人格的影響力に関する認知傾向といった学校適応感と関連することが予測される。

このように、小学校時代のエピソード内容やその印象度、形成時期を明らかにし、エピソードの印象度と学校適応感との関連について検討を加えることは、児童・生徒の人格形成を援助する教育内容や環境を整備する上で、ひとつの手がかりになりうるものと考えられる。

## 方 法

**調査項目の作成：** 潜在のカリキュラムの人格的次元に関するエピソード内容の項目の収集・作成のために、S大学教育学部の4年生、男子46名女子51名計97名に調査協力を依頼した。この事前調査では、「1) あなたのかつての小学校生活における、あなたと先生(クラス担任以外でもよい)、および、あなたと友人との交流・接触の面で、良い意味でも悪い意味でも強く印象に残っている事柄があれば、どんなことでも結構ですから、具体的にあげてください。また、併せて、2) ある時のある先生の振舞いや態度、身なり、表情など、先生に関することで強く印象に残っていることがあれば詳しく書いてください」との問いを用意することによって、自由想起(箇条書)の形式で回答を求めた。

その結果、潜在のカリキュラムの人格的次元に関する項目内容として、計317の具体的エピソードが収集された。そこで、これらの収集項目のうち、重複した内容を除外し、表現に修正を加え、これに教育実習生2名と小学校教員2名の意見を参考にして、最終的に、対教師との交流や接触に関するエピソード16項目、友人との交流や接触に関するエピソード16項目、および教師の身なりや身体的特徴、外見等に関するエピソード16項目、計48項目を作成した。

これらの潜在的カリキュラムの人格的次元に関するエピソード内容の項目に、鈎(1994<sup>6)</sup>)が使用した各教科の授業や学習領域に関するエピソード内容15項目、および特別活動領域に関するエピソード内容14項目、さらには、潜在的カリキュラムの制度・組織的次元や背景的次元内容に相当する、学校環境領域(小学校の環境や設備、校風等)に関する16のエピソード項目を加え、総計93項目をエピソード内容測定のための項目とした。

以上の暫定的に6つの領域で構成されたエピソード内容の項目に対して、被験者に自身の小学校時代のことを回想させることにより、その印象度を「たいへん印象に残っている(4点)」「まあ印象に残っている(3点)」「あまり印象に残っていない(2点)」「まったく印象に残っていない(1点)」の4段階評定で回答させた。なお、これらの93項目には、被験者が各項目の意味内容を把握し、理解しやすくするために、各項目とも以下に示したような、複数の具体例を付記した。

EX1: 7. ある時、先生に作品をほめられたこと  
(例: 絵画や工作、書道作品、ノートへの賞賛など) ……教師との交流・接触領域

EX2: 47. ある時、友達の言葉で傷ついたこと(例: 悪口をいわれた、馬鹿にされたなど) ……友人との交流・接触領域

EX3: 30. ある担任の先生の癖のこと(例: 手を腰にやる、腕を組む、唇をとがらせるなど) ……教師の特徴・外見領域

また、教師や友人との交流・接触、教師の特徴・外見に関する領域、および各教科の授業や学習領域に関するエピソードのように、その形成時期が特定可能な項目(計63項目)については、それらの形成時期を把握するために、「たいへん印象に残っている」と回答した被験者に対してのみ、それらのエピソードが生じた学年を記入させた。

以上のエピソード内容に関する項目に加えて、被験者のかつての小学校生活全般に関する充実度を把握するために、「あなたの小学校時代における学校生活は、どの程度充実していたか」との設問(「大変充実していた」「まあ充実していた」「あまり充実していなかった」「まったく充実していなかった」の4段階評定)に対して、回答を求めた。また、かつての

小学校教師の人格的影響力に関する認知傾向を把握するために、「小学校時代に、あなたの現在の生き方や考え方、人格形成に良い意味で影響を与えてくれた先生がいたか」との設問(「大勢いた」「少しいた」「ほとんどいなかった」「まったくいなかった」の4段階評定)に対して、回答を求めた。

**調査の実施:** 都内の私立S大学の文系5学部の2~4年生511名を調査対象とした。その結果、回答不備であった15名を除いて、男子291名、女子205名計496名を分析対象とした。調査は、1995年の5月の連休明けの授業を利用して実施された。

## 結 果

### 1. エピソードの種類抽出

暫定的に6つの領域で構成されたエピソード内容(全93項目)の種類を明らかにするために、主成分分析を施した<sup>注)</sup>。バリマックス回転の後、最終的に解釈が可能な8因子を抽出した。これらの8つの因子に対して、.440以上の高い因子負荷量を示した代表的な項目、計38項目が最終的に選出された。これらの項目について、再度主成分分析を施した結果が、Table 1である。これらの8因子によって全分散の43.1%が説明される。

その結果、第I因子は、図工や家庭科、音楽等の技能教科や、社会、理科等の教科の授業内容(主として、授業中に教わった言葉や数量に関する知識・技能や、授業過程の全般的な印象; Ex. ○年生の図工の時間に書いた絵、○年生の理科の時間に光合成に関する知識を授かったことなど)に関するエピソード内容を表わしているので、「授業内容」因子と命名した。第II因子は、担任教師の歩き方や姿勢、後ろ姿、表情、話し方、癖等のエピソード内容をあらわしているので、これを「教師の外見」因子と命名した。

第III因子は、学校周辺の自然環境や校舎、校庭の様子や運動場内に設置されていた遊具など、主として校舎とその周辺に関するエピソード内容を示しているので、「外的環境」因子と命名した。また、第IV因子は、校則に違反したことに対する叱責や教師によるさまざまな罰則、体罰に関するエピソード内容をあらわしているので、これを「教師の叱責」因子と名づけた。

注) データの解析に際しては、SASシステムを活用した。

**Table 1** 小学校時代におけるエピソードの種類

第Ⅰ因子 (寄与率16.21%)	因子負荷量
62. 図工の授業内容 (具体的内容や工夫面等)	.7387
63. 家庭の授業内容 (具体的内容や工夫面等)	.6407
61. 音楽の授業内容 (具体的内容や工夫面等)	.6220
59. 社会の授業内容 (具体的内容や工夫面等)	.6100
60. 体育の授業内容 (具体的内容や工夫面等)	.5967
58. 理科の授業内容 (具体的内容や工夫面等)	.5870
57. 算数の授業内容 (具体的内容や工夫面等)	.5026
第Ⅱ因子 (寄与率6.03%)	因子負荷量
23. 担任の歩き方 (早歩き, 摺り足だった等)	.7461
20. 担任の姿勢 (腕組, 背筋が伸びていた等)	.7072
24. 担任の後ろ姿 (強そう, 寂しそうだった等)	.6840
22. 担任の表情 (喜怒哀楽の表情・顔等)	.5878
21. 担任の話し方 (早口, なまりがあった等)	.5861
30. 担任の癖 (手を腰にやる等のしぐさ)	.5583
第Ⅲ因子 (寄与率5.94%)	因子負荷量
83. 学校の周辺環境 (たんぼ, 裏山があった等)	.7255
82. 校舎・学校建築 (木造, プレハブだった等)	.6948
84. 学校の規模 (マンモス校だった等)	.6619
81. 校庭の様子 (池, 大木があった等)	.6321
85. 校庭の遊具 (すべり台, 回旋塔があった等)	.5207
第Ⅳ因子 (寄与率4.19%)	因子負荷量
3. 校則違反への叱責 (廊下を走る等)	.7229
6. 教師による罰則 (正座, 宿題の追加等)	.7053
8. ふざけへの叱責 (掃除中, 授業中等)	.6664
12. 教師による体罰 (平手打ち等)	.6212
1. いたずらへの叱責 (机, 壁への落書等)	.4735
第Ⅴ因子 (寄与率3.98%)	因子負荷量
89. 校章のこと (デザイン, 形等)	.7303
88. 学校の伝統 (創立何年の学校だった等)	.6332
87. 服装のきまり (制服, 年中半ズボン等)	.6231
90. 学校設備 (二重窓, ストープ等)	.5441
92. 学校・学級目標 (モットー等)	.5370
第Ⅵ因子 (寄与率3.75%)	因子負荷量
54. 教科書の内容 (あるページの写真や絵等)	.5926
53. 自習時の内容 (自習の具体的内容)	.5852
55. 視聴覚教材内容 (ビデオやOHPの内容)	.5767
56. 国語の授業内容 (具体的内容や工夫面等)	.5266
第Ⅶ因子 (寄与率3.08%)	因子負荷量
37. いじめられる (殴打, 仲間はずれ等)	.7581
47. 友達による心傷 (悪口, 中傷等)	.7151
45. 裏切られたこと (約束を破られた等)	.6724
10. 教師による心傷 (疑われた, 酷評等)	.4488
第Ⅷ因子 (寄与率2.69%)	因子負荷量
76. 運動会の様子 (演目, 雰囲気等)	.6853
66. 卒業式の様子 (国旗掲揚, 歌, 呼び掛け等)	.6424

第Ⅴ因子は、校章のデザインや形、学校の伝統、あるいは学校独自の服装のきまり、校内の諸施設、学校のモットーや学級目標等、主として、学校内部のことにかかわるエピソード内容に関するものである。これを「内的環境」因子と命名した。加えて、第Ⅵ因子は、自習時の学習内容や教科書の掲載内容、視聴覚機器を用いた学習内容 (特定のドリルなどの教材や教科書に掲げられた写真・絵, 図, ビデオ・OHP等で呈示された特定のビジュアルな教材内容など)、国語の授業内容等に関するエピソード内容で高い因子負荷量が認められた。ここでは、国語の授業内容も、主として、取り上げられた教材内容 (教科書に掲載された物語文の内容など) に強く影響されることが予想されるので、ここではこれを「教材内容」因子と名づけた。

同様に、第Ⅶ因子は、仲間はずれ等のいじめられ体験や悪口・中傷等の友だちによる心傷、裏切りに関するネガティブなエピソード内容で構成されているので、これを「心的外傷」因子と命名した。さらに、第Ⅷ因子は、運動会の様子や卒業式の様子にかかわる内容で構成されているので、これを「学校行事」因子と命名した。

以上、ここでは、小学校生活にかかわるエピソード因子として、「授業内容」と「教材内容」因子 (以上、教科内容領域)、「教師の外見」と「教師の叱責」因子 (以上、対教師関係領域)、「内的環境」と「外的環境」因子 (以上、学校環境領域)、「心的外傷」因子 (対友人関係領域)、および「学校行事」因子 (特別活動領域) の計5領域8因子が抽出された。これらのことから、小学校教育におけるエピソード内容は、主として、各教科の授業内容や教材内容等の学習次元、教師や友人との交流・接触等の潜在的カリキュラムにおける人格的次元、および校内外の環境等の潜在的カリキュラムにおける背景的次元に関する内容で構成されているといえる。

## 2. エピソードの印象度と形成時期

主成分分析の結果得られた、エピソード内容に関する8因子を構成する全38項目 (因子負荷量が.440以上の項目) の印象度をFig. 1に示した。4段階評定のうち、「大変印象に残っている」か「まあ印象に残っている」のいずれかに回答した比率は、「81. 校庭の様子」や「82. 校舎・学校建築」、「83. 学校の周辺環境」、「85. 校庭の遊具」等の「外的環境」因

子(背景的次元)に関する項目で最も強く、全5項目の平均は89.0%であった。これに次いで、「66.卒業式の様子」と「76.運動会の様子」のいわゆる「学校行事」因子にかかわる2項目で、平均83.8%の印象度が示された。

以下、エピソード内容の印象度を、各因子ごとの項目平均でみると、「授業内容」因子(61.1%)、「教師の叱責」因子(56.1%)、「教師の外見」因子(43.2%)、「心的外傷」因子(42.6%)、「内的環境」因子(42.3%)の順となっており、「教材内容」因子を構成する項目内容への印象度は最も低かった(37.1%)。ちなみに、「授業内容」因子では、「60.体育」「61.音楽」「62.図工」「63.家庭」等の技能教科に関するエピソード内容の印象度が強く、「教師の叱責」因子では、「3.校則違反に対する叱責」や、正座等の「6.教師による罰則」に関する項目で印象度が強かった。また、「教師の外見」因子では、「22.担任の表情」に関する項目内容で高い印象度が認められた。

なお、「授業内容」「教師の叱責」「教師の外見」「心的外傷」の各因子を構成するエピソード内容(計22項目)については、それらが生起した学年を記述させたが、結果は、いずれの因子においても、低学年(1,2)年<中学年(3,4年)<高学年(5,6年)

の順で、高学年ほどエピソードが形成される割合が高く、一要因分散分析の結果、学年間に有意差が認められた( $F=8.967, p<.01$ :低一中  $t=1.370, NS$ ,中一高  $t=2.785, p<.05$ ,低一高  $t=4.155, p<.01$ )。

### 3. エピソードの印象度と小学校生活の充実度

こうしたエピソード内容は、小学校生活への適応感の指標としての、大学生自身のかつての小学校生活全般に関する充実度の認知とどの程度関連するのであろうか。

ここでは、前述のエピソード内容の8因子を構成する諸項目の中から、各因子への因子負荷量の最も高い項目を1つずつ選択して、計8項目(総カテゴリー数32)を説明変数として取り上げ、数量化理論Ⅱ類による検討を試みた。

なお、小学校生活の充実度に関する質問項目(カテゴリー数4)を外的基準として取り上げたが、ここでは、カテゴリー反応数がセルによって0になることを避けるために、カテゴリー数を補正して、「大変充実していた」と回答した学校生活充実群(H群:  $N=158$ )と、「あまり」または「まったく充実していなかった」のいずれかに回答した学校生活非充実群(L群:  $N=67$ )の、2つのカテゴリーを用いて分析をおこなった。

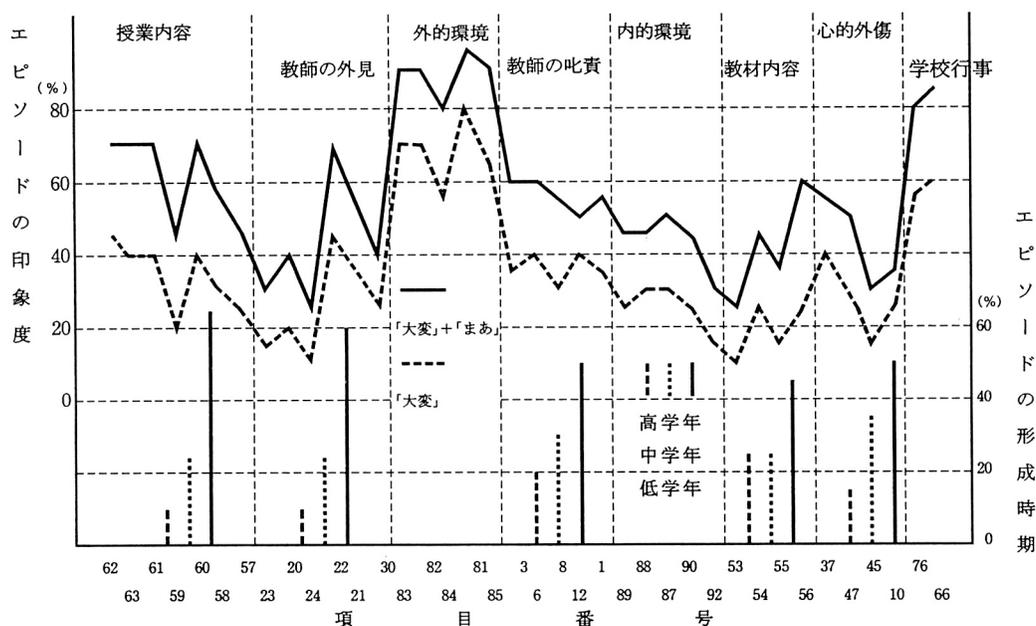


Fig. 1 エピソード内容の印象度と形成時期

Table 2に分析結果が示されたが、サンプルスコアの平均値は充実群=0.384, 非充実群=-0.905であり、これらの平均値は、Table 2に示されたカテゴリー・ウエイトの正負の方向および値の大きさがその群の特徴を表わすことと対応している。なお、判別に寄与する要因の程度は、レンジによって示される。

まず、「友だちにいじめられた」とする心的外傷に関するエピソードの有無は、小学校生活の充実度を左右する大きな要因となっており（レンジ=1.4014）、エピソードとしてのいじめられ経験の強さが、小学校生活の非充実傾向を規定していることがうかがえる。同様に、「運動会」等のいわゆる学校行事に代表

Table 2 小学校生活の充実度とエピソード内容（数量化Ⅱ類）

項 目	カテゴリー名	反応サンプル数			DIM 1 カテゴリー ウエイト	レンジ (順位)
		H群	L群	計		
62. 図工の授業	1 大変印象あり	81	29	110	0.0715	0.6729 ⑦
	2 まあ印象あり	30	15	45	-0.2087	
	3 あまりなし	34	13	47	0.2428	
	4 まったくなし	13	10	23	-0.4301	
23. 担任の歩き方	1 大変印象あり	25	7	32	0.3488	1.0415 ④
	2 まあ印象あり	27	4	31	0.5870	
	3 あまりなし	66	26	92	0.0267	
	4 まったくなし	40	30	70	-0.4545	
83. 周辺の環境	1 大変印象あり	111	45	156	-0.0230	1.0821 ③
	2 まあ印象あり	33	14	47	0.1601	
	3 あまりなし	9	6	15	-0.2374	
	4 まったくなし	5	2	7	1.3963	
3. 校則違反への叱責	1 大変印象あり	66	21	87	0.1282	0.7920 ⑥
	2 まあ印象あり	28	12	40	-0.0652	
	3 あまりなし	39	25	64	-0.3619	
	4 まったくなし	25	9	34	0.4300	
89. 校章のこと	1 大変印象あり	43	12	45	0.3319	0.8628 ⑤
	2 まあ印象あり	29	17	46	-0.4822	
	3 あまりなし	49	11	60	0.3805	
	4 まったくなし	37	27	64	-0.2954	
54. 教科書の内容	1 大変印象あり	43	21	64	-0.1811	0.3311 ⑧
	2 まあ印象あり	25	11	36	-0.0720	
	3 あまりなし	48	16	64	0.1500	
	4 まったくなし	42	19	61	0.0751	
37. いじめられたこと	1 大変印象あり	52	43	95	-0.5722	1.4014 ①
	2 まあ印象あり	15	10	25	-0.5555	
	3 あまりなし	31	7	38	0.3344	
	4 まったくなし	60	7	67	0.8291	
76. 運動会の様子	1 大変印象あり	102	32	134	0.3128	1.1327 ②
	2 まあ印象あり	35	17	52	0.2015	
	3 あまりなし	15	15	30	-1.7172	
	4 まったくなし	6	3	9	-0.0976	

Table 3 教師に対する人格的影響力の認知とエピソード内容 (数量化Ⅱ類)

項 目	カテゴリー名	反応サンプル数			DIM 1 カテゴリー ウェイト	レンジ (順位)
		H群	L群	計		
23. 担任の歩き方	1 大変印象あり	9	18	27	-0.6987	0.8473 ⑤
	2 まあ印象あり	10	11	21	-0.0066	
	3 あまりなし	29	44	73	0.1301	
	4 まったくなし	13	51	64	0.1485	
20. 担任の姿勢	1 大変印象あり	17	26	43	0.0237	0.1968 ⑧
	2 まあ印象あり	12	14	26	0.1085	
	3 あまりなし	18	38	56	0.0260	
	4 まったくなし	14	46	60	-0.0883	
24. 担任の後ろ姿	1 大変印象あり	10	9	19	1.0184	1.8298 ①
	2 まあ印象あり	11	8	19	1.1807	
	3 あまりなし	25	39	64	0.1890	
	4 まったくなし	15	68	83	-0.6491	
22. 担任の表情	1 大変印象あり	37	49	86	0.3830	0.9876 ③
	2 まあ印象あり	14	25	39	0.0001	
	3 あまりなし	7	33	40	-0.6045	
	4 まったくなし	3	17	20	-0.4381	
3. 校則違反への叱責	1 大変印象あり	23	44	67	-0.1990	0.5180 ⑦
	2 まあ印象あり	12	21	33	0.1331	
	3 あまりなし	20	36	56	0.2819	
	4 まったくなし	6	23	29	-0.2361	
6. 教師による罰則	1 大変印象あり	28	50	78	0.2385	0.7206 ⑥
	2 まあ印象あり	12	19	31	0.1561	
	3 あまりなし	11	28	39	-0.1436	
	4 まったくなし	10	27	37	-0.4821	
12. 教師による体罰	1 大変印象あり	19	45	64	-0.2996	0.8630 ④
	2 まあ印象あり	9	9	18	0.5425	
	3 あまりなし	8	22	30	-0.3205	
	4 まったくなし	25	48	73	0.2605	
10. 教師による心傷	1 大変印象あり	15	38	53	-0.2356	1.2764 ②
	2 まあ印象あり	4	16	20	-0.9223	
	3 あまりなし	16	25	41	0.1413	
	4 まったくなし	26	45	71	0.3541	

される集団的活動に関するエピソードの強さは、小学校生活の充実度を大きく規定している要因であることがわかる (レンジ=1.1327)。

以上の点に加えて、「先生の歩き方」といった教師の外見に関するエピソードや、「校章」等の内的環境エピソードに関する印象度の強さは、非充実群で低

い傾向にあることが示唆された。なお、「学校周辺環境」に関しては、レンジの値は大きいですが、カテゴリー・ウェイトと反応サンプル数が対応していないので、解釈はひかえた。

4. エピソード内容と教師の影響力に関する認知傾向  
小学校時代のエピソード、なかでも、小学校教師

の行動全般に対する印象形成は、今ひとつの学校生活への適応感の指標である、かつての小学校時代の教師の影響力に関する認知傾向を規定していることが予想される。そこで、ここでは、人格的次元に関するエピソード内容のうち、「教師の外見」因子を構成する項目の中から4項目、「教師の叱責」因子を構成する項目から3項目、および「心的外傷」因子から教師行動にかかわる項目を1つ抽出して、計8要因を説明変数として、これに、かつての小学校教師の人格的影響力の認知傾向に関する質問項目(カテゴリ数4)を外的基準として取り上げ、数量化Ⅱ類による検討を行なった。

なお、ここでも、外的基準としてのかつての小学校教師の人格的影響力の認知傾向に関する設問は、カテゴリ数を補正して、小学校時代に、自身の現在の生き方や考え方、人格形成に良い意味で影響を与えてくれた先生が「大勢いた」とする好影響認知群(H群:  $N=61$ )と、「ほとんど」または「まったくいなかった」とする好影響否定群(L群:  $N=124$ )の、2つのカテゴリを用いて分析をおこなった(Table 3)。

その結果、レンジやカテゴリ・ウェイト、反応サンプル数から総合的に判断して、好影響認知群では、好影響否定群に比べ、「担任の後ろ姿」(レンジ=1.8298)と「担任の表情」(レンジ=0.9876)に関するエピソード内容の面で、一般的に印象度が強いことがうかがえる。これに対して、「教師による心傷」(レンジ=1.2764)や「教師による体罰」(レンジ=0.8630)に関するエピソード内容の強さは、教師へのネガティブな態度や感情を規定する要因である程度うかがえる。すなわち、好影響否定群では、好影響認知群に比べて、教師による心傷や体罰等を被ったとする割合が一般的に高くなっている。

しかし、その他の「教師による罰則」や「校則違反への叱責」、「担任の姿勢」等については、レンジやカテゴリ・ウェイトから判断して、教師への影響度を規定している要因とはみなしにくい。

## 考 察

本研究では、授業内容や特別活動内容等の教育内容領域、および校内外の環境を中心とした潜在的カリキュラムの背景的・組織的次元に、今ひとつの潜在的カリキュラムの重要な次元である対教師・友人

関係に関する人格的次元を加えることにより、より全体的な視点から、大学生からみた自身の小校時代におけるエピソード内容について検討を施した。

主成分分析の結果、エピソードの種類として、教科内容に関する因子として「授業内容」と「教材内容」の2因子が、教科外活動に関する因子として、「学校行事」因子が抽出された。これらの3因子は、いわゆる今日のわが国の教育課程における教育内容、すなわち、公的カリキュラムにかかわるエピソード内容を意味している。また、学校環境に関するエピソード内容として、「内的環境」と「外的環境」の2因子が抽出されたが、これらの2因子は、いわゆる潜在的カリキュラムにおける背景的次元や組織的次元に相当するものであると考えられる。

以上の諸因子に加えて、新たに、対教師関係にかかわるエピソード内容として、「教師の外見」と「教師の叱責」に関する2因子が、また対友人関係にかかわる因子として、「心的外傷」因子が抽出され、潜在的カリキュラムの人格的次元に関するこれらの諸因子が、小学校教育におけるエピソード内容の構成要素であることが指摘された。

エピソード内容の印象度に関しては、一般的に、学校環境のうちの施設や建物等の「外的環境」因子にかかわる項目(背景的次元)で最も強く、これに「学校行事」「授業内容」に関する項目が続いた。これに、「教師の叱責」や「教師の外見」、「心的外傷」に関するエピソードの印象度がこれに続いており、「内的環境」や「教材内容」に関する印象度を上回った。

以上のことから、対教師・友人関係といった潜在的カリキュラムにおける人格的諸次元は、校舎や学校の周辺環境に関する感覚的記憶や、公的カリキュラムに関する教育内容とともに、印象形成の面でも強いことがうかがえる。なお、これらのエピソード内容の形成時期についても検討を加えた結果、エピソード内容は、高学年での出来事がより想起されやすい傾向にあり、低・中学年とのあいだに有意差が認められた。

既に、自伝的記憶の想起数は、事象が生じた学年の進行に伴う知的発達に応じて増加することが、斉藤(1994<sup>12)</sup>)によって示唆されているが、本研究においても、こうした傾向が支持されたといえる。ただ、回想的手法という性格上、知的発達という側面だけにかぎらず、調査時点に、より近いエピソード

ド内容が想起されやすいという点は否めないであろう。

本研究では、小学校生活における多くのエピソードは、学校適応感の指標としての、小学校生活の充実度や小学校時代の教師の人格的影響力に関する認知を規定する要因となることが予測された。

こうした点について数量化Ⅱ類の手法を用いて検討をおこなった結果、友人によるいじめ等の心的外傷によるネガティブなエピソードは小学校生活の非充実傾向と、また、運動会等の学校行事や教師の歩き方(教師の外見)、校章(内的環境)等のエピソードは、小学校生活の充実感を規定する要因であることが示唆された。心的外傷エピソードに象徴されるように、潜在的カリキュラムの構成要因のひとつである友人とのネガティブな人格的接触は、学校生活の充実度を左右する重要な要因のひとつであると考えられる。

また、教師の影響力に関する認知と、教師の人格的次元にかかわるエピソードとの関連について検討した結果、教師の後ろ姿や表情、歩き方等の「教師の外見」因子に関するエピソードは、教師との接触に関するポジティブな認知と関連し、教師による疑念や酷評等の「心的外傷」因子や、体罰等の「教師による罰則」因子に関するエピソードは、教師に対するネガティブな認知に関与していることが指摘された。

既に、熊谷(1990<sup>5)</sup>)は、児童・生徒に潜在的に影響を及ぼす教師の言動として、1) 人間の生き方のモデルとなるような言動、2) 児童・生徒に対する期待の表明、および 3) 懲戒の3つの側面があることを示唆しているが、このうち、教師の懲戒に関する言動は、本結果が示唆しているように、そのあり様によっては、健全な教師-生徒関係を妨げる方向に作用する点に留意する必要があるであろう。

以上の結果をふまえて、今後は、研究の性格からして、大学生という限られた年齢層にとどまらず、過去経験からの時間的経過を考慮した、幅広い年齢層へのアプローチが望まれる。また、これまでの記憶研究の中でも、いわゆる意味記憶とエピソード記憶との関連において、学校で学習される内容は、知識等の意味記憶が中心であるにもかかわらず、児童・

生徒には学習内容以外の個人的経験としてのエピソード記憶が記憶されていることが多々あることが、タルヴィング(Tulving, E. 1983<sup>14)</sup>)や太田(1983<sup>9)</sup>, 1988<sup>10)</sup>)によって指摘されているが、こうした点では、今後は、自伝的記憶における焦点要素としてのエピソードの内容や、背景的要素としての時間、場所等の諸要因を十分に吟味した上で、その教育的意義について、詳細な分析がなされる必要があるであろう。

## 文 献

- 1) Bloom, B. S. All Our Children Learning. McGraw-Hill Book Co., 1981, 147-148.
- 2) 伊藤裕子 女子青年の性役割観と父母の養育態度—大学生の職経歴選択を中心に— 教育心理学研究, 1980, 28, 67-71
- 3) Jackson, P. W. Life in Classrooms. Holt Rinehart and Winston, Inc., 1968, 4-6.
- 4) 加納正康 卒業生の意識からみた高等学校教育における特別活動の意義に関する実証的研究 日本特別活動学会紀要, 1994, 3, 68-82.
- 5) 熊谷一乗 潜在的カリキュラムの発掘 教育心理, 1990, 38, 578-583.
- 6) 鈎 治雄 学校教育におけるエピソード記憶と特別活動 日本特別活動学会紀要, 1994, 3, 55-67.
- 7) 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 1987, 7, 135-146.
- 8) 尾原祐美・小谷津孝明 自伝的記憶の時間的体制化 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 1994, 413.
- 9) 太田信夫・小松伸一 エピソード記憶と意味記憶 教育心理学研究, 1983, 31, 64-65.
- 10) 太田信夫編 エピソード記憶 誠信書房, 1988, 7-8.
- 11) 太田信夫 記憶と学習指導 (3) —記憶力は重要か— 教育心理, 1989, 37, 74-79.
- 12) 齋藤洋典 自伝的記憶 (2) 高齢者による感情随伴事象の想起特性 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 1994, 414.
- 13) 谷井淳一・上地安昭 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 1994, 42, 68-75.
- 14) Tulving, E. Elements of episodic memory. London: Oxford University Press, 1983. (太田信夫訳 タルヴィングの記憶理論—エピソード記憶の要素 教育出版, 1985, 14-15)